

温もりに優しめ

新座市立池田小5年

中尾 晃子 10(新座市)

カイロは冬の小さく静かな味方だ。朝、まだ外が白く冷え切っている時間帯にポケットの中であつと温まり始める。最初は頼りない温もりなのに、握っているうちに、じわじわと体の奥まで溶け込んでくる。その温かさには、寒さだけではなく、少し寂しい心までも満たしてくれる気がする。

登校時、通学路の中でカイロを握りしめていると、不思議と安心する。誰かに手を繋いでもらっているような、そんな錯覚さえ覚えるのだ。使い捨てで、無言であつただけの温かいだけのものにして、そこには確かな優しさがある。

春が近づくと、カイロの出番は減っていく。けれど、棚の奥にしまつてある残つたカイロを見るたび、あの寒い日の朝や、冷たい風の匂いを思い出す。カイロは冬の記憶を静かに閉じ込めた、小さな記憶と優しさの塊なのかもしれない。